

AR CA DIA

65
SUMMER 2015

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

眼の極楽⑬ 江戸の花園

館長 榊原悟

家にありたき木は

そこで余談を一つ。

狩野永納の『春夏花鳥図屏風』六曲一双である(図は前回掲出)。確かに図はこれで完結しているようにもみえる。向かつて右隻右端より左隻左端へ、春、夏を代表する花木、草花が並び、季節は移る。金雲、金地に群青の流れが両隻をゆるやかに繋ぐ。右隻の「柳に桜」、左隻の「松に藤」を中心に構図が整えられる。通常の「花鳥図屏風」が、図の中核をなす巨木を、右隻右端、左隻左端に片寄せ、そこからそれぞれ巨木の幹枝を、左方、右方へ画面中央方向へ伸ばして構図の安定を図るのに較べ、本図では、桜も松もやや画面中央に寄り過ぎていようにも見える。が、両隻並べてみるとバランスもよく、安定した構図をみる。図がこれで完結していると得心がいくのも、こんなところにあるのだろう。しかし、描かれた季節は春と夏のみ。これでは、すなわち「春夏花鳥」のみでは、めぐる季節の情趣を味わうところを、

心ある人に見せばや津の国の

難波あたりの春の景色を 能因

心なき身にもあわれは知られけり

鳴たつ沢の秋の夕暮れ 兩行

と詠んで大切にされたわたしたちの、このころは納得できるはずもない。当然、これに対応する秋冬の、その花や鳥を描いた六曲一双屏風があつたのでは、と推測し、それを求めるに違いない。

いや、実際に二連の作として「秋冬花鳥図」の一双があつたか否か、そんなことは実はさしたる問題ではない。もし仮になかつたとしても、名著『本朝画史』を著すほどの永納が、和漢の書物に通じていたことは疑いなく、「定家詠月花鳥次和歌」を含め和のころを自らのものとしていたことは想像するに難くない。となれば「春夏花鳥図」を描くに当って、「秋冬花鳥図」に思いを至すのは火を見るよりも明らか。その永納をこのころの内に結んだ「秋冬花鳥図屏風」がどんな内容の作であつたのか。そこにどのような花木、草花が

ESSAY

選ばれていたかは、まことに興味ある話題となるだろう。

さしずめサントリー美術館の、この画題で呼ばれる四曲一双の晴れやかな屏風が気になるが、三本の松を主に梨や楓、雪積もる椿や楨を添えて秋、冬を表すなど、モチーフ選択や図様構成に類例が乏しく、単純にこれと比較するわけにはいきまい。となれば、『春夏花鳥図』がそうであつたように、「定家詠月次花鳥和歌」や「畠山匠作亭詩歌」に詠まれた花と鳥などが大いに参考になるになるだろう。なかでも、

はるよりもまさきのゆきの花かつら

冬をさかりにむめひらく也 畠山匠作亭十二月和歌

と詠まれた雪梅は、「定家詠」にも含まれ、「秋冬花鳥図屏風」の左隻(冬)の中核をなす樹木となつていた可能性が高い。現に永納はボストン美術館本『四季花鳥図屏風』の左隻左端に雪の白梅を一図の主役として描いているではないか。また永納の父山雪も、妙心寺天球院方丈上間二の間障壁画の内に、同趣の「雪梅図」を取上げる。永納も山雪も雪梅が冬を代表する花木であると思つていたことは間違いない。「秋冬花鳥図」の左隻は、雪梅を中心に遠く雪積もる杉や松、さらには椿などを配して構成したのだろう。

では右隻、秋の花鳥はどうなのか。

秋と云えば、春と秋との優劣を競つた「春秋の争い」を挙げるまでもなく、「秋山千葉の彩」(『万葉集』巻二)であり、「秋山の下氷丈夫」(『古事記』中巻)である。「したぶ」とは動詞で色が変わること。つまり「秋山の下氷丈夫」とは秋山の色づく葉の美しさを擬人化した語である、紅葉(黄葉)こそが秋を象徴すると言ふのだろう。その紅葉の代表こそが楓。畠山匠作亭詩歌でも、確かに紅葉が選ばれているではないか。いや、定家の絶唱とも云うべき三夕のあの三首、

見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦の苦屋の秋の夕暮れ 定家

も、まずは花と紅葉が前提となつていたことを見逃してはなるまい。しかも花に対する紅葉である。

春はただ花こそは咲け

野辺に錦を張れる秋は優れり

凡河内躬恒論春秋和歌より

別に「春秋の争い」の一方、秋に与しようと言うのではない。ここでも春の桜には、秋の紅葉できまり、というのである。となれば「春夏花鳥図」で桜を描いた以上、「秋冬花鳥図」で楓を取上げないはずはない。実際、永納と同時代の絵師土佐光起が、桜と楓を二曲一々に描き分けた「春秋花鳥図」が伝わるが（サントリ―美術館蔵）、その存在自体、そうした推定を裏付ける。吉野の桜には、竜田の紅葉と云うわけである。

だが、わたしは楓を選ぶについて、さらに別の要因もあつたのでは、と睨んでいる。しかし、それについて述べるためにも、あらかじめ二つの作品を見ておく必要があるだろう。

・「春秋花鳥図屏風」六曲一雙（図1） 土佐光起筆 額川美術館蔵

・「日月四季花鳥図屏風」六曲一雙（図2） 筆者不詳（室町時代・十五世紀） 出光美術館蔵

前者は、その名称からも分かるようにサントリ―本の二曲屏風と同趣の作。ただしサントリ―本が桜と楓に絞って春秋の美を対比させた―その意味でまきれもない「春秋の争い」の表現を意図したとも云えるのだが、額川美術館本では、これに加えて柳と松を、それぞれに配することで、さらに一層その対比を華麗に演出した。金地に緑青、群青、胡粉、朱が映じ、まさしく輝くばかりの美しさだ。桃山絵画のそれを彷彿させる巨木表現も圧倒的。描き了えて光起は快哉を叫んだのではなかったか。そんな凄みさえある。光起一代の快作である。

一方、後者は、その制作が、十五世紀にまで遡る貴重な室町屏風。現在は剥落褪色も著しく痛々しいが、かつては金銀の切箔、破箔、微塵箔、野毛、砂子などが全面に施された、前者とはまた別趣の華麗な作とみられる。桜に雉、萩に鹿を描くなど、定家詠はじめ和歌で示されたモチーフ選択からの影響が色濃い。

問題としたいのは、両者に描かれた樹木だ。桜に柳、松、そして楓である。先に永納がもし「春夏花鳥図」に連なる「秋冬花鳥図」を描いたならば、必ずその秋の一隻は楓を取上げるに違いないとした、その楓である。常盤の松の緑に楓の朱が栄える。つまり柳に桜、松に楓というモチーフの選択は、大いにあり得る組合せ、ということだ。二点の屏風はその証左となろう。しかも、それがほぼ二百年余りを隔てた二つの屏風に登場する。とするならば、そもそもこれら四種の樹木を組合せさせた要因があつたのではないか、そんな疑いを持つのは人情だろう。

それを考える上で興味深い情景が「住吉物語絵巻」（静嘉堂文庫美術館蔵）に描かれ

ESSAY

ていた。貴族の邸の門前にこの四種の樹木が植えられていた。芽吹いた柳に満開の桜、これらを屏風に移せば、額川本にならんと云わんばかりの豪華さである。都の貴族の邸の庭をまさしく彷彿せしめるのだが、その柳に桜、楓に松について兼好法師（卜部兼好二八三〜三三〇）は、こうも云う。

家にありたき木は、松・桜。松は五葉もよし。花は二重なる、よし。（略）梅は白き・薄紅梅。一重なるが疾く咲きたるも、重なりたる紅梅の匂ひめでたきも、皆をかし。（略）柳、またをかし。卯月ばかりの若楓、すべて、万の花・紅葉にもまさりてめでたきものなり。橘・桂、いづれも、木はもの古り、大きなる、よし。（「徒然草」第三九段）

樹木は何によらず大木に限るとか、若葉の楓を愛でるなど兼好の好みがあらわだが、柳、桜、松、楓、これら四種と梅は、邸の庭に植えてみたい樹木であつたという。もとよりひとり兼好だけの選択ではない。わたしたちの先祖の雅好とこのころが選抜いた樹木が、この四種であつた、と云うのだろうか。兼好は、それを「家にありたき木」と述べた。その「ありたき木」が植栽された庭は、「ありたき」庭と云うに他なるまい。光起は、その庭を描いたので。桃山風の巨木表現をもつて。「木は、もの古り、大きなる、よし」とした兼好に、これを見せたならば、必ずや気に入つたはずだ。そう云えば光起は、「花は盛りに月は限なきをのみ見るものは」（第三七段）のあの一段を絵巻に描いている。当然、その直後に続く第三九段も承知していたに違いないのだが……、いづれにせよ、柳、桜に松、楓、わたしたちの先祖のころと眼が、これらの木々を愛でて措かないはずはない。しかし、これら四種の樹木を組合せるについては、さらに別の背景もあつたようだ。その点については、章を改め述べる機会があるだろう。

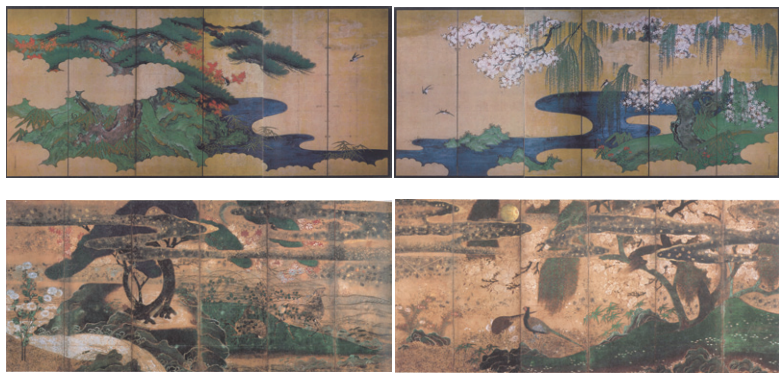


図1「春秋花鳥図屏風」六曲一雙 土佐光起筆 額川美術館蔵
図2「日月四季花鳥図屏風」六曲一雙 筆者不詳 出光美術館蔵

改修工事とこれから

内藤高玲

岡崎市美術博物館の改修工事が平成二十七年七月六日から始まりました。当館が開館したのがちょうど一九九一年前の平成八年七月六日、ぴつたり一九九一年後になっています。大規模な工事のため、駐車場には、施工業者の方が利用される現場事務所も完成し、工事が始まるという雰囲気醸し出しています。まずは建築からということで、建築工事から始めており、アトリウムにも足場が架つて、作業員さんたちが手際よく足場を渡り歩いているのは、高所恐怖症の自分にとっては見事です。展示室の方も可動壁のクロスがサンプルとしてはぎ取られている場所が見られるようになりましたが、いよいよ全面改修が始まり、既存のクロスとカーペットの剥ぎ取りも始まりま

す。一九年にわたって使用されてきたクロスには、多くのピンの痕が残されておりますが、中には特殊な打ち方をしたと思われる痕跡もあり、その当時の担当学芸員の苦労を偲ばせるものがあります。

また今回の改修工事では、空調設備改修工事、電気施設改修工事

も同時に実施します。それぞれの業者間と当館、建築課が出席して毎月工程会議を開き、お互いに工程を調整しつつ進めていくのですが、なかなか調整がつかずに大変です。空調設備工事なども、まったく新しい配管をできればいいのですが、いったん天井を外し、管の寸法を測って配管するという一見すると手間がかかる方法をとっています。電気設備工事については、詳しい工程表がまだ出ていないので、はっきりしたことはわかりませんが、同様に既存の管路を使っていくこととなります。

文化財の建造物も松皮の葺き替え等は二〇年ごとという場合が多いですが、当館も一九年、機能の回復をはかるという改修工事の必要性は文化財の建造物と変わりません。使えるものは手を入れて機能を維持しつつ使用していく。今回の改修工事では、そのことを忘れずにしていきたいと思います。

工事の様子や進行状況については、ホームページなどで随時お知らせしますのでもよろしく願います。

EXHIBITION

工事進捗・裏話？

野澤太雅

工事進捗・裏話で何か一文をと原稿依頼を受けたものの、さて何を書いたのか。進捗といつても、今はまだ本工事が始まる前の下準備の段階である。下準備の段階ではあるが、駐車場や工事個所の地下通路・機械室、展示室、アトリウム等の様相は、昨年度までとはガラリと変わっている。

駐車場にはすでに現場事務所が設置され、安全確保のための進入禁止のバリケードも配置された。北側入口前は工事車両の乗り入れがあるため、石畳保護目的の養生シートが二面に敷かれている。

地下通路や電気室・機械室の一部には、以前は木製パネルやアクリルカーバー、仮設展示台の部品、さらには全長九m近い川船までもが置かれていた。しかし天井の配管取替工事を行うために足場を組まねばならず、当然これらのものは片付けなければならなかった。来年度以降も必要なものを選択し、不要なものは処分、必要なものも倉庫を借りて預かってもらい、地下通路はきれいさっぱり何も無い状態になった。さらに床の剥離洗浄・ワックスがけを行い、見違えるように白い姿を取り戻した。そこを歩けば、

コツコツと足音が心地良く響く。工事終了後に、またここに預かってもらっていたものが「戻ってきてしまう」事を思うと、何とも悩ましい。

アトリウムでは内部足場の組立が半分以上進んでいる。ユニット化された支柱・筋交い・手すり等が規則正しく組み上げられた姿は、まるでオブジェのようでもあり。中々に壮観である。このアトリウムであるが、足場を組む作業中はがんがんと空調を効かせ、扇風機・送風機を総動員して熱中症対策をしている。排煙窓を開けることができれば、さらにいくらか室温を下げることも期待できるはずなのだが、ここもまた修繕箇所であり、この足場が必要なのだ。世の中ままたないものである。

「裏話」というには当たり障りのない話だったかもしれないが、本当の「裏話」は、オモテにできないから「裏話」なのである？



家康講演会盛況

堀江登志実

家康公顕彰四百年祭事業の当館における講演会「三河時代の家康を考える」はすでに二回が終了しました。第一回目は「家康研究の最前線」ということで国學院大學講師の平野明夫さんに、第二回目は「三河」向探について」ということで本願寺史料研究所副所長の金龍静さんにそれぞれお話いただきました。聴講者は二回目三八六名、二回目四一八人でした。いずれも定員二五〇名を大幅に超えました。今回の講演会のスタイルは、講演者とコメントターの二人による対談により内容のポイント、問題点をよりクリアにしてゆくことを目指すものです。今回、平野さんの話には中京大学教授の村岡幹生さんに、金龍さんの話には同朋大学准教授の安藤弥さんにコメントターをお願いしました。

コメントターには、話をいただいた方と歴史的な論点で対立的な立場にある方もあります。第一回の平野さんと村岡さんとはともに松平氏の研究者として知られた方ですが、松平清康への評価をめぐっては大きく立場が違います。今回のなかでも、平野さんは、家康は桶狭間合戦後直ぐ

に反今川の行動をとるという考えであるのに対し、村岡さんは「年ほどを経たのちに反今川の行動に出ると考え方を異にしています。こうした対立の視点があってこそ、歴史事実の究明と前進があるものと思います。」

今回の講演会では、家康に関する最新の情報、歴史学で問題点となっている論点を市民の皆さんにもぜひ知っていただきたいと意図しました。研究者を講師にたてましたので、難しい堅い話になり、参加者が少ないのではないかと不安な要素もありました。しかし、多くの方に聴講いただきまずはひと安心です。アンケートからは内容が難しいなどの厳しい批判もありましたが、新しい事実に接した喜びを記していただいている方も多くありました。家康に対する新しい事実を提示してこそ家康像はより豊かなものとなり、家康の顕彰につながるべくゆくものと考えます。



COLUMN & TOPIC

家康の足跡をたどる

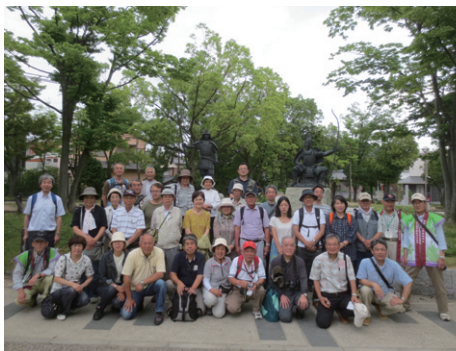
湯谷翔悟

時は戦国永祿三年。桶狭間合戦時、大高城にいた家康は、敗軍の報を聞き大樹寺へ退却する。しかし追手から逃げられないと観念し、先祖の墓の前で自害を図る。それを諫め止めたのは登誉上人。「厭離穢土欣求浄土」の言葉をうけ、家康は僧衆とともに織田軍を撃退する。その後義元方が退却した岡崎城に「捨て城なら拾おう」と言い入城し、以後家康は三河統一にひた走っていく。と、合戦時の家康の足跡をあらすじで書くところな感じでしようか。

「家康公顕彰四百年」を記念した今回のバス見学会は、三河時代の家康の足跡をたどる形で、全五回予定しています。その第一回「桶狭間合戦」を六月二〇日に開催しました。奇しくも四五五年前とほぼ同じ時期（合戦は旧暦五月）の見学ということで、当時と同じく雨が降り出しそうな空を心配しながら、大高城↓桶狭間古戦場↓杏掛城↓大樹寺を巡りました。桶狭間古戦場は、豊明市と名古屋市緑区に伝承地があります。今回は緑区のガイドの方をお願いし、ご案内いただきました。現在は住宅街となっており、当時を偲ば

せるものはほとんど残っていません。しかし義元本陣推定地からの眺望や、当時湿地だったと思われる低地帯など、意外と起伏のある地形が印象的でした。その地に立ち、歩くことで、本や史料よりもずっと頭の中の合戦はリアルに描かれました。その他の見学先も、その地でしか知り得ない情報であふれていました。

定員三〇名のところに、一〇倍を超える応募をいただいたこの見学会。家康への関心の高さと、実際に現地を歩くことの重要性を改めて実感する時間となりました。ご協力いただいた皆さまにこの場を借りて御礼申し上げます。



宇賀弁才天とはインドのサラスバティ河の神格化である弁才天と水を司る蛇の神格化である日本の宇賀神が結びついたものです。本像は像高二九・三cm、人面蛇身の宇賀神を頭にのせています。一般的に宇賀神は老人の顔で表されますが、本像の宇賀神はこやかに微笑んでいます。弁才天の目は線刻で表され、口許には微笑を湛えています。頭部には兜、胸元には鎧が彫られ、長袖の衣を着て、岩座に立つ、福德神と戦闘神の性格を併せ持つ弁才天の姿です。残念ながら左手の先と右手の持物は失われています。

本像は元は瀧山寺もしくは瀧山寺の塔頭である恵日堂の旧蔵と伝えられており、個人宅に移座されていましたが、平成二六年度に当館へ寄附されました。愛知県内の円空仏は三二〇〇体を超えますが、他所からの移座を除き、三河の円空仏といえるものは二〇体程です。岡崎市内には六箇所、七体が確認されています。このうち一体が瀧山東照宮の十一面観音立像(像高三三・五cm、当館寄託)、二体が瀧山東照宮に近い経津主神社の毘沙門天と不動明王の立像(像高六三・二cm、六〇・五cm、市指定文化財、当館寄託)であり、本像を含め近隣三箇所に四体の像が確認できたこととなります。安置されていた寺社、像の大きさなどから他所からの移座とは考え難く、円空が岡崎にて造像した可能性が高まったといえます。



※参考文献：小島梯次「岡崎市の円空仏」(『岡崎市史研究』第32号、平成24年)

COLUMN & TOPIC

ルーミア出身のシュルレアリスト、プローネルは父親の影響もあり、早くからオカルトや交霊術に関心を持っていた。彼の絵には呪術的、予知的要素があるといわれている。

一九三三年から《片目のない自画像》を立て続けに描いた彼は、その七年後、実際に片眼を失うことになる。岡本太郎は以下のように回想した。

「画家仲間と酒を酌交わし芸術談義が盛り上がった頃、ドミンゲスがスペイン訛りで何か叫びながら振りおろしたビール瓶が、ちょうど立ちあがろうとしたプローネルの左眼に直撃した。突然うめきと叫び声が起こり、プローネルが顔を押しさえてのけぞった。すぐに彼を車に乗せて、程近いコッシャン病院にかつき込んだ。だが医師は見して絶望を宣言した。やがてその悲劇からしばらくたって、プローネルの姿を見かけて話しかけると、右の瞳は淋しそうな光をたたえて笑ったが、左眼はガラスの義眼があらぬ方を見ていた。

恐ろしい事故の前、世に片眼ほど醜悪なものはないと語り、嫌悪の象徴として片眼の化け物をよくモチー

フにしていた彼が……

さらに不可思議なことに、この悲劇から十年ほど遡った頃、当時は高価であったカメラを友人が入手、パリの街角を撮影して歩いていた。一枚の撮影許可を得た彼は、見知らぬ家をカメラに収めたのだが、それが後に眼を失う悲劇の舞台となった家であった。

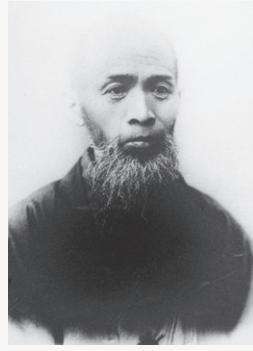
一九三九年に描かれた本作は前年に起きたこの悲劇が直接反映されている。中央の闇にある眼を、黒い人物が狙おうとしているところを、慈悲深い顔をした半獣神が両手を広げて阻止しているように見える。包み込むような白い球体は胎内の象徴のようであり、《誕生の球体》という題名は眼球再生の願望ととれる。全体に癒しのオーラに満たされたような本作は、内に秘めた強迫観念や苦悩から解放され、導きのままに生きようとする心の表れなのか。これを機に、彼は片眼で現実を見すえ、失った眼でますます内面を見つめるようになり、芸術の幻視的性格をいっそう強めていった。

二九三九年 油彩・カンヴァス
六五・〇×八・一〇cm 当館蔵

資料図版は表紙参照

ガラ紡がつなぐ縁

伊藤久美子



臥雲辰致

臥雲辰致(がうんたつち)(または「ときむね」、一八四二―一九〇〇年)という人物をご存じでしょうか。信州は旧堀金村(現安曇野市)出身で、明治時代に独自の綿糸紡績機「ガラ紡機」(ガラ紡)を発明しました。ガラ紡は綿花を糸に紡ぐ水力式の機械で、動かすと「ガラガラ」と大きな音がすることからこの名が付けられました。また、この機械で紡がれた糸のこともガラ紡と呼びます。

額田郡では、明治二年(一八八八)に紡績組合により臥雲を招きガラ紡の技術指導を受けています。これにより滝村(現岡崎市滝町)をはじめこの地方でのガラ紡産業は大きく発展しました。臥雲はこの功績が讃えられて岡崎市名誉市民になっており、市内朝日町には紡績組合が建立した顕彰碑もあります。

さて、前置きが少々長くなりまし

たが、去る五月二十七日、まつもと市民芸術館でガラ紡コンサートなる催しが開かれました。臥雲家直系の孫にあたる弘安氏が、岡崎市では名誉市民に叙せられて顕彰碑まであるというのに、長野では極めて知名度が低いのを憂え、臥雲辰致とその功績を知ってもらおうと計画されたものです。ガラ紡研究者四名による講演とクラシックコンサートという異色の組み合わせ、しかも平日の午後、小ホールといえども客席数は二百以上。人が集まるのだろうかと思手に心配してしまいました。結果は、地元の深志高校同窓会などの強力なバックアップを受けて、盛況な集まりとなりました。四時間にわたる長丁場は全く飽きさせない、有意義で楽しい内容でした。

最終構想は、松本の地に臥雲記念館を建てること。それに向けての第一歩でしたが、閉会後の交流会では地元の方々が少々お酒も入っていたせいか、おらが村の偉人への熱い思いを、楽しそうに次から次へと語られていたのが印象的でした。臥雲翁が取り結ぶ長野と岡崎の縁。夢の続きを期待したいと思います。

COLUMN & TOPIC

神君・三河守・家康公

― 流転する「英雄」像

湯谷翔悟

「徳川家康公顕彰四百年記念事業」ということで、静岡・浜松そして岡崎市を中心に様々なイベントが開催されている。事業趣旨にあるように「ゆかりの地に住む市民・県民」が「誇りを感じる」べき英雄であることは間違いない。しかし過去には、家康との繋がりを強調しないことに徹した時代があったと考えられる。明治初年である。その様子を『大樹寺文書』からうかがってみよう。

江戸時代の記録中では、家康のことを「神君様」と呼んでいる。家康は神であり、幕府に何か要望するときには、その実現のために家康との繋がりを強調している。それが明治二年には、家康のことを「徳川三河守」と単なる「武将のように記している。その記述の基となる史料では「徳川三河守家康」と名前まで書いてあるにもかかわらず、である。今川義元については「駿河之城主今川治部少輔義元」(史料では花押のみ)と詳しく記しているのと対比すると、繋がりの強さを少しでも伝えないようにしていることがうかがえる。さらに不入、門前での下馬下乗など、戦国時代からの特権は朝廷より与えられ

たものと、天皇・朝廷ひいては明治政府との繋がりを主張している。このように明治の新しい治世下では、前政権との繋がりは不利に作用するとして、前面に出すことは忌避されたようである。ただし大樹寺では、松平氏や家康の法要はその後も継続されている。寺領を失い、経営の危機にあつた時期という状況を鑑みると、大樹寺の尊崇の念の篤さを強く感じる。

その一方で、明治五年に岡崎城付近の地域が康生町(家康生誕の地に因むと言われる)と名付けられている。わずかに二、三年で「家康公忌避」の風潮が変わつたのか。いや、そもそもそんな意識はなかったのか。人々の意識をさぐるというのは難しい。

また、家康を顕彰するようになったのはいつ頃なのか。変化があつたとすればその契機や時代状況はいかなるものであつたのか。現代の顕彰の在り方を考える上でも興味深い話である。

INFORMATION

■美術博物館 家康公400年祭記念講演会

「三河時代の家康を考える」

第4回 9月12日(土)「家康の東三河攻略」
講師/山田邦明氏(愛知大学教授)
コメンテーター/小林吉光氏(豊川市文化財保護審議会委員)
第5回 10月10日(土)「家康の城」
講師/千田嘉博氏(奈良大学学長)
コメンテーター/奥田敏春氏(岡崎市文化財保護審議会委員)
第6回 11月14日(土)「三河から遠州攻略へー今川氏と武田氏ー」
講師/本多隆成氏(静岡大学名誉教授)
コメンテーター/柴 裕之氏(東洋大学非常勤講師)
※各回講演会後に、講師とコメンテーターによる対談を行います。
会場:岡崎市福祉会館6階 大ホール
(岡崎市朝日町3丁目2番地)
時間:いずれも午後2時~午後4時30分
定員:250名(事前申込不要) 参加費無料
主催:岡崎市美術博物館・中日新聞社
後援:岡崎商工会議所

■美術博物館 家康公400年祭記念 バスツアー

三河から遠江へ

ー三河時代の家康の足跡をたどるー
第3回 9月19日(土)「三河一向一揆」
当館出発→本宗寺→勝鬃寺→本證寺→上宮寺→浄珠院→当館着
第4回 10月17日(土)「東三河攻略」
当館出発→岩略寺城址周辺→牛久保城址→一宮砦跡→二連木城址→吉田城→当館着
第5回 11月21日(土)「遠州攻略」
当館出発→龍潭寺・井伊谷城址→浜松市博物館→浜松城・東照宮→当館着
時間:いずれも午前9時30分~午後5時[雨天決行]
定員:30名(応募多数の場合は抽選) 参加費無料
申込方法:往復はがき(1回1枚)の「往信用裏面」に①コース名②参加者全員(4人まで)の郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・電話番号、「返信用表面」に代表者の郵便番号・住所・氏名を明記の上、岡崎市美術博物館「400年祭バスツアー」係までお申込みください。
申込期限:第3回8月28日(金)、第4回9月25日(金)、第5回10月30日(金)※いずれも必着

■平成27年度収藏品展

暮らしのうつりかわり

平成28年1月16日(土)~3月6日(日)
岡崎市美術博物館は休館のため、おかげさまで世界子ども美術博物館で開催します。
※詳細は随時岡崎市美術博物館HPにてご紹介していきます。

最近、ツーシーターのオープンカーが四〇過ぎのオジさん世代のセカンドカーとして売れていると聞く。その一方で、若者のクルマ離れが進んでいるようだ。車はなくても生活できるが、スマホがなくては、そんなところにも暮らしの移り変わりを感じる。(吉)

昭和時代に普及した物の一つに「車」がある。当初は高嶺の花であつただろうが、家族のため車を所有しようとする家庭の努力、それに報いようとするメーカーの努力などにより、いつしか一般家庭に普及するようになった。だが、幼い頃の我が家に車はなかつたため、その便利さを感じることはなく、車に関する家族の繋がりはほとんどなかったと記憶している。ところが今の我が家では、家族が皆自分の車を持ち、狭い庭には車が溢れている。父と子の会話も車の話で盛り上がり、展覧会鑑賞には行かなくても車のディーラーには喜んでついでくる。長年一人寂しく愛読していた車の月刊誌も親子で回し読みとなり、今では購入者である私に最後に回ってくる。

暮らしの移り変わり

当館では毎年「暮らしのうつりかわり」という展覧会を開催している。五〇を過ぎた私には、昭和の時代を懐かしむ催しであり、同時に老いを感じる催しでもある。

昭和時代に普及した物の一つに「車」がある。当初は高嶺の花であつただろうが、家族のため車を所有しようとする家庭の努力、それに報いようとするメーカーの努力などにより、いつしか一般家庭に普及するようになった。だが、幼い頃の我が家に車はなかつたため、その便利さを感じることはなく、車に関する家族の繋がりはほとんどなかったと記憶している。ところが今の我が家では、家族が皆自分の車を持ち、狭い庭には車が溢れている。父と子の会話も車の話で盛り上がり、展覧会鑑賞には行かなくても車のディーラーには喜んでついでくる。長年一人寂しく愛読していた車の月刊誌も親子で回し読みとなり、今では購入者である私に最後に回ってくる。

おしゃべり、あれこれ。

ちゃぶ台返し世界大会

日頃の不満を叫びながらちゃぶ台をひっくり返すという、ユニークな憂さ晴らしの大会があるということを知った。思わず、笑った。岩手県矢巾町で町おこしのために始められたローカルな催しだが、全国から参加者が集まるようになり、今年六月の大会で九回目だという。縦三〇cm、横四〇cm、高さ二二cmの競技用のちゃぶ台をひっくり返す。卓上にはおもちゃの食器や食材が載せられており、指定の食材の飛距離を競うのだが、今年飛んだのはサンマだそう。過去にはホットドッグだったこともあったようだが、やはりちゃぶ台と言えばサンマだよ、と妙に納得。さらに、白いかっぱを着たお母さん役の女性がいる。参加者はお母さんの「〇〇さん、やめて〜」という声を合図に、不満を爆発させながらちゃぶ台をひっくり返すのだ。芸の細かさに、笑いとともに思わず拍手である。叫んだ言葉やコスプレなどのパフォーマンスも審査対象で、優勝者には金色のちゃぶ台や地元産のお米五kgが贈られるとのこと。九月には東京でも開かれるという。

昭和を代表する道具であるちゃぶ台が注目されるのは嬉しい。が、本来の使い方ではないちゃぶ台返して覚えられるのは、皆さん誤解なきようお願いします。(伊)

編集後記 | 「休館中だから暇なんですよ?いいよね」とよく言われてしまう今年度。しかし来年度以降の展覧会準備や日々の業務などに加えて、工事対応や家康顕彰企画が目白押し。あれ?例年より忙しい…。今号はそうした活動の一端を記しています。◆また今号より「私の心象資料」と題して、収藏品をご紹介していきます。資料受入れの経緯やご厚意など、担当学芸員は資料を見る目に「思い入れ」が加わります。常設展示が無い当館の資料をご紹介する場を兼ねて、担当の目からの作品解説を著していきます。ご味読ください。(湯谷)

表紙図版:ヴィクトル・ブローネル《誕生の球体》1939年 当館蔵



設備改修工事のため、
岡崎市美術博物館は平成28年3月31日まで休館します。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第65号 2015年8月発行
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)